

【特集】

## 関東大震災と 横浜市電気局の 写真記録

— 中野春之助旧蔵ガラス乾板を中心に —



ご自由に  
お持ちください

【展示余話】

## 一九二三年八月、 関東大震災前の横浜

— 「横浜市電気局写真アルバム」を中心に —

【資料紹介】

## 八木下婦美関係資料に見る 「職業婦人」の戦前・戦後

横浜都市発展記念館

ハマ発 NEWSLETTER 第39号 2023(令和5)年8月10日発行(年2回発行・不定期)  
編集/横浜都市発展記念館 発行/公益財団法人横浜ふるさと歴史財団 〒221-0021 横浜市中区日本大通12 TEL.045(663)2424 FAX.045(663)2453  
電子ログ/高橋健介 印刷・製本/株式会社エコープリント 本誌からの無断複製を禁じます。

### EXHIBITION 特別展のご案内



地震発生時の八木彩霞 1923(大正12)年9月  
八木彩霞画「関東地方大震災画録」 横浜開港資料館保管

### 神奈川震災100年 横浜都市発展記念館・横浜開港資料館合同特別展 関東大震災100年 大災害を生き抜いて — 横浜市民の被災体験 —

1923(大正12)年9月1日午前11時58分、神奈川県を震源とするマグニチュード7.9の地震が発生、南関東一帯は激しい揺れに襲われました。その後、横浜では大火災が発生し、市街地は僅か一日で焼け野原となります。そうしたなかを生き抜いた横浜市民は、自らの体験を日記や回想記、写真等に残していきました。本展示では、横浜の関東大震災を残された個人の記録を中心に再現していきます。

【会期】2023(令和5)年8月26日(土)  
~12月3日(日)

会場 横浜開港資料館企画展示室



### 寄贈資料の紹介

令和5年3月以降に受贈した資料です。(敬称略)

| 寄贈資料名                              | 点数  | 寄贈者  |
|------------------------------------|-----|------|
| 池澤利明氏旧蔵資料(一括)                      | 33  | 池澤節子 |
| 区制施行50周年記念事業<br>「横浜・中区史」資料複写写真[一括] | 106 | 秋山敬史 |
| 「横浜市横浜尋常小学校卒業記念」(アルバム)             | 1   | 〃    |

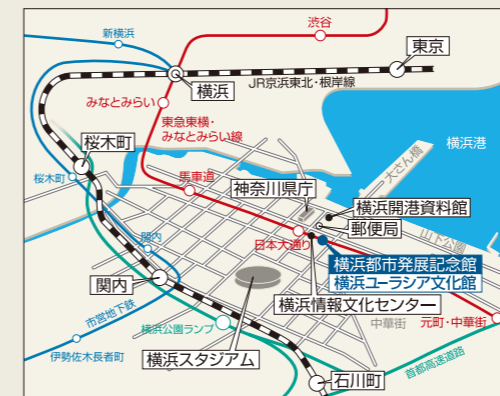
### 休館のお知らせ

横浜都市発展記念館・横浜ユーラシア文化館は、  
全館空調機更新工事のため、下記の期間休館いたします。  
なにとぞご了承のほどお願いいたします。

2023(令和5)年5月29日(月)  
~ 2024(令和6)年夏頃(予定)

### 交通アクセス

- 東急東横・みなとみらい線日本大通り駅(3番出口)0分
- 横浜市営地下鉄ブルーライン関内駅(1番出口)から徒歩約10分
- J R 京浜東北・根岸線関内駅(南口)から徒歩約10分
- 横浜市営バス・神奈中バス「日本大通り駅県庁前」下車徒歩1分



### MUSEUM SHOP

ミュージアム・ショップより

- 刊行物
- 1 『横浜鉄道クロニクル 発祥の地の150年』 ①  
横浜都市発展記念館/編 定価1,540円
  - 2 『激震、鉄道を襲う! 一関東大震災と横浜の交通網』 ②  
横浜都市発展記念館/編 定価1,320円
  - 3 『スポーツの祭典と横浜』 ③  
横浜都市発展記念館/編 定価980円



オンラインショップをご利用ください!

当館の各種刊行物・オリジナルグッズ等については、オンラインショップでお求めいただけます。  
QRコードを読み取ると、オンラインショップへジャンプします。



横浜都市発展記念館  
ホームページ

http://www.tohatsu.city.yokohama.jp/



※本誌は当館ホームページでも  
ご覧いただけます。



### 編集後記

2023(令和5)年は1923(大正12)年9月1日に発生した関東大震災から100年の節目の年です。横浜開港資料館で開催される合同特別展にあわせ、本号は関東大震災特集としました。特集では、横浜の惨状を記録した中野春之助旧蔵ガラス乾板について紹介しています。展示余話では横浜市電気局写真アルバムから震災前夜の横浜の状況を紐解いています。また、今年は当館開館20年の節目でもあります。資料紹介では、当館の入る建物、横浜中央電話局に勤務した「職業婦人」のあゆみを紹介しています。ぜひご覧ください。(松)



●表紙図版 山下町山上より焼跡ヲ望ム  
1923(大正12)年9月 中野春之助撮影  
横浜都市発展記念館所蔵

# 関東大震災と

## 横浜市電気局の写真記録

### ――中野春之助旧蔵ガラス乾板を中心――

#### 一、写真資料への眼差し

一九二三（大正一二）年九月一月の関東大震災を撮影した写真は、グラフ誌や写真集、絵葉書などの形で現在も残っている。戦後、周年行事的に関東大震災の振り返りが行われるなかで、惨状を捉えた写真（さらにそれから派生した絵葉書）は、様々な媒体で活用されてきた。しかし、写真そのものに検証作業を加え



① 中野春之助旧蔵ガラス乾板 横浜市発展記念館所蔵

たものはほとんどなく、無批判に使用されている例も少なくない。写真資料を活用するには、①いつ、②どこで、③誰が、④何のために撮影したのか、この四つの点を押さえることが重要である。そうしたなか、横浜市の歴史資料保存活用機関である横浜開港資料館、横浜市発展記念館、横浜市史料室の三施設は、関東大震災関係写真の発掘に努めるとともに、その分析作業と体系化を進め、横浜の写真師であった岡本三郎や前川謙三、西野芳之助など、撮影者の存在、写真資料の来歴等を明らかにしてきた。

今回はこれまでの研究成果を踏まえつつ、新たに横浜市発展記念館に寄贈された中野春之助旧蔵ガラス乾板（①）について紹介したい。この資料群は地球物理学者の神沼克伊氏（国立極地研究所名誉教授）が発見したもので、一部は「首都圏の地震と神奈川」（有隣堂、二〇一二年）において紹介されている。横浜市発展記念館では、神沼氏の協力を得て、春之助の子孫である中野貞男、いずみこ

夫妻から資料の寄贈を受けた。その後、調査を進めた結果、ガラス乾板は横浜市電気局編「大正十二年九月一日大震災火災電気鉄道被害情況」（横浜開港資料館所蔵、以下、「電気鉄道被害情況」）に収められた写真の原板であることが判明した。その点を中心に解説を加えていく。

#### 二、中野春之助とガラス乾板

最初に資料群の所蔵者であった中野春之助（②）について整理したい。ご子孫の話によれば、春之助は一八八七（明治二〇）年頃に現在の平塚市出縄で生まれ、横浜興信銀行（現・横浜銀行）に勤務し



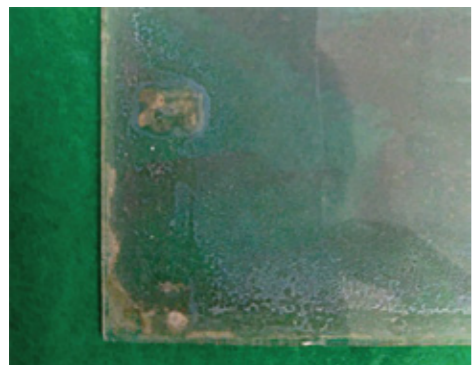
② 中野春之助 昭和期 中野貞男氏所蔵

し、震災後の財政難を克服するため、一九二九年、横浜市は電気局の高級吏員（書記・書記補）を対象とした人員整理を実施、春之助もその対象となった（神奈川県労働部労政課編『神奈川県労働運動史 戦前編』神奈川県、一九六六年）。横浜興信銀行に勤務したのはそれ以降だと考えられる。

さて、春之助は電気局在職中、趣味のカメラを活かして電気局の行事等を記録しており、人びとの活き活きとした姿が確認できる。関東大震災関係の写真もその延長で撮影されたと考えられ、臨時市



③ 仮市役所屋上の臨時市会 1923(大正12)年9月30日 中野春之助撮影 横浜市発展記念館所蔵



④ 薄紙を貼り付けていた痕跡 (ガラス乾板の部分拡大)



⑤ 焼失横浜駅プラットフォーム 1923(大正12)年9月 中野春之助撮影 横浜市発展記念館所蔵

会の写真（③）など、市吏員以外は撮影が難しい写真もいくつかある。「電気鉄道被害情況」には、パノラマ写真を含めて六〇枚の写真があり、そのうち三四枚の原板を確認した。「電気鉄道被害情況」の写真には、西野芳之助の写真と同じく、同一画面上に撮影場所に関する情報が含まれている。ガラス乾板を確認すると、同じ位置に薄紙を貼り付けていた痕跡があるので、原板で間違いない（④）。この写真は「鉄道震害調査書」（鉄道省大臣官房研究所、一九二七年）だけでなく、「横浜復興誌」（横浜市役所、一九三二年）や「横浜市電気局事業誌」（横浜市電気局、一九四〇年）などにも用いられていた。また、「電気鉄道被害情況」の発行時期は不明だが、春之助は一九二四年のみ庶務課と会計課を兼務しているため、この時期に編集作業が行われたと推察できる。

#### 三、撮影者は誰か

全部で三九枚のガラス乾板を収めていた箱には、「大正十二年横浜震災原板」、「中野春之助」の文字が確認できる。ここから写真群の撮影者は中野春之助だと考えられるが、⑤の写真は例に検証作業を行いたい。⑤は横浜の被災状況を示す代表的な写真で、横浜駅ホームの職員を捉えている。小池徳久「横浜復興録」（横浜復興録編纂所、一九二五年）を皮切りに、様々な「災害誌」で用いられ、戦後の関東大震災関係の展示でも活用されてきた。二〇一三（平成二五）年の横浜市発展記念館の特別展「関東大震災と横浜―廃墟から復興まで―」でも岡本三郎撮影の駅長の写真として紹介した。横浜開港資料館所蔵の岡本三郎の資料群に同じプリントがあり、岡本自身が裏面に「横浜駅と高橋駅長」と記していたためである。

ただし、岡本の撮影した他の写真とプリントのサイズが異なるほか、加工された痕跡も確認できる。原板を確認すると、駅員の両脇にはもともと多く人が写っており、岡本の所持していた写真などは時計と駅員が中央にくる形にトリミングされていた。また、当時の横浜駅長は太田峰尾で、「高橋」ではない。島中惣治郎編・発行『帝国海陸運輸交通界官民列伝』（一九二四年）に収められた太田の写真と原板を比較すると、顔がむくんでいるものの、鼻や頬の形から同一人物だとわかる。中野

のガラス乾板発見まで筆者は「電気鉄道被害情況」の撮影者を岡本だと考えていたが、ここで考えを改めなければならぬ。おそらく岡本は外部からこの写真を入手したと考えられる。岡本は被災地の写真撮影を契機に、報道写真に目覚め、ニュースを配信する横浜写真通信社を設立するが、震災当時は師匠の玉村康三郎から独立して半年も経っていないかった（堀勇良「震災を記録した写真家 岡本三郎」、『開港のひろば』第四二号、一九九三年一〇月）。また、横浜市役所は前川謙三に依頼して被災地を撮影しているが、「電気鉄道被害情況」と重なる写真はない。この点は西野芳之助撮影の写真群も同じである。加えて、ガラス乾板のデジタル化の過程で岡本や前川、西野の写真と比較を行ったところ、全体的に焦点の調整が不十分な点もわかった。撮影者の技術はアマチュア以上だが、プロの写真師の域には達していない。そうした点も含め、ガラス乾板の撮影者は中野春之助と考える方が適切だろう。

写真撮影の技術は歴史資料としての価値を落とすものでなく、被写体からは関東大震災に関する様々な情報を引き出すことが可能である。今後、春之助の撮影したガラス乾板は、横浜の関東大震災を語る際の基礎的な歴史資料の一つになるだろう。横浜市発展記念館では、ガラス乾板について継続的な調査研究を進めていく予定である。改めて貴重な歴史資料を寄贈してくださった中野ご夫妻、仲介者の神沼克伊氏に感謝申し上げたい。

（吉田 律人）

た後、一九四七（昭和二二）年に六〇歳で亡くなった。非常にハイカラな人物で、独学で写真撮影の技術を学び、それを趣味にしていたという。ただし、この伝聞情報だけではガラス乾板と春之助との関係は判然としにくい。そこで資料群に横浜市電（路面電車）を運用する電気局関係の写真が多い点に着目した。そして戦前の「職員録」を調査したところ、春之助の名前を確認することができた。

一九〇四（明治三七）年に開業した横浜電気鉄道株式会社は、一九二一（大正一〇）年に市営化され、職員も横浜市電気局へ移った。ガラス乾板と一緒に寄贈された「横浜市電気局写真アルバム」には、横浜電気鉄道時代の写真もある。春之助は同社に勤務していたと推察できる。内閣印刷局の発行する『職員録』には、一九二二年から一九二八（昭和三）年まで横浜市電気局書記として春之助の名前が掲載されている。また、横浜市役所内記課の発行する『横浜市職員録』でも会計課書記として春之助の名前があり、経理関係の業務を担っていた。しかし、震災後の財政難を克服する

# 余話 展示

## 一九二三年八月、 関東大震災前の横浜 ―「横浜市電気局写真アルバム」を中心に―



① 手荷物電車  
1923(大正12)年8月 中野春之助撮影  
横浜市発展記念館所蔵

一、第一次世界大戦後の横浜  
関東大震災の発生以前、横浜に暮らす人びとは穏やかな日常を過ごしていた。サラエボ事件を契機に、一九一四(大正三)年七月に勃発し、一九一八年一月の休戦協定で終結した第一次世界大戦は、日本の重化学工業化を促し、地方か

ら都市への移住者を多く生み出していった。一九一四年で推定四二万七六五五人だった横浜市の現住人口は、一九一九年には推定四六万九八八八八人まで増加したが、その後、戦後恐慌の影響で減少し、関東大震災前年の段階で推定四四万一〇四八人となっていた(各年度『神奈川県統計書』)。明治末から大正期にかけて臨海部では港湾整備や埋立事業が進み、神奈川県政治・経済の中心地である関内地区には、横浜市役所や神奈川県庁、開港記念横浜会館のように耐震・耐火のレンガ建築も登場した。また、外国人の働く山下町では西洋風の商館が並ぶ一方、繁華街である伊勢佐木町など、日本人の集住する関内地区では、木造建築が密集する状態だった。そうした街中を路面電車(横浜市電)が走り、荷馬車や人力車、自転車なども行き交っていた。路面電車を運用する横浜市電気局、その会計課に勤務した中野春之助は、趣味の写真を活かして同局の行事等を記録していった。春之助の残した写真アル

bumには、関東大震災前後の写真が数多く収められており、電気局の施設や街の様子、職員たちの日常がうかがえる。一部、一般に販売されていた東京方面のニュース写真を含むが、大部分の写真の撮影者は春之助だと推察できる。注目すべきは、二代目横浜駅や桜木町駅、馬車道交差点などを撮影した写真で、いずれも「大正十二年八月写」と記されている。つまり、これらの写真は、偶然にも地震発生の一ヶ月前に撮影されていたことになる。本稿では、春之助の撮影したこれらの写真から地震発生前の横浜の様子を紐解いていきたい。



② 手荷物電車の車内  
1923(大正12)年8月 中野春之助撮影  
横浜市発展記念館所蔵

二、月見橋車庫と手荷物電車  
一九二二(大正一一)年四月、横浜市内の商品輸送に活用するため、横浜市電気局は三六形車両の七五号車と七六号車を手荷物電車に改造した。①はその七六号車で、高島町七丁目(現・西区高島町二丁目、さとう横浜店所在地)の月見橋車庫付近で撮影されている。車両右側の二階建ての建物は一九一九年九月に開業した神奈川県公設浴場である。この浴場は実業家の増田嘉兵衛が増加する労働者に癒しの空間を提供するために建設した施設で、多くの人でにぎわった。続いて②は手荷物電車の内部である。商人と一緒に、枝豆やトウモロコシ、長ネギ、瓜など、野菜の入った竹籠が積み重ねられている。座席は荷物棚に変化しているが、つり革や車内の広告などに客



③ 花咲橋付近から横浜駅を望む  
1923(大正12)年8月 中野春之助撮影  
横浜市発展記念館所蔵

車時代の面影が見える。写真中央、「車掌運転手募集」の広告には、「一、年齢満二十歳以上」、「一、学力 高等小学校卒業程度」、「一、見習 約五十日間手当ヲ支給ス」と募集要件が記されているほか、試験会場として横浜市電気局教習所、問い合わせ先として職業紹介所などの情報も確認できる。写真から市民生活の一端がうかがえる。

### 三、二代目横浜駅

③は桜木町通り、花咲橋付近から高島町方面を撮影した写真である。この地点で路面電車は正面の横浜駅方面へむかう路線と、右側の神奈川方面にむかう路線に分岐していた。写真中央には、一九一

四(大正三)年八月一日に完成した二代目横浜駅が建っており、その前では、自転車や荷車、自動車、電車などが往來している。女性たちは日傘をさして夏の日差しを防いでいた。道路を人が堂々と歩くなど、自動車の普及は一部に止まっていた。「神奈川県統計書」によれば、一九二二年三月三十一日現在の横浜市内の車両数は、乗用馬車二二台、荷積用馬車一六九台、牛車二四台、荷車一万三四七七台、乗用自動車二九一台、荷積用自動車四三台、人力車二九六三台、オートバイ一三七台、自転車一万八五一六台の計三万六六三二台だった。自転車は主要な交通手段だったことがわかる。道路の左側では商店が軒を連ねる一方、右

側には、横浜駅と桜木町駅を結ぶ京浜線(電車)の高架がある。一九一五年二月三日、東京駅と桜木町駅の間を電車が走るようになった。

### 四、桜木町駅 (初代横浜駅)

④は③の場所から東側に移動した地点で、桜木町停留所から桜木町駅を撮影している。一八七二(明治五)年の鉄道開業と同時に運用が始まった初代横浜駅は、新橋駅(後の汐留駅)とともに日本最古の

駅舎だった。初代横浜駅は二代目横浜駅の開業によって「桜木町駅」と名称を変えたが、横浜の陸の玄関口としての機能は維持した。駅舎の正面には、人力車や自動車が並んでおり、利用者はそれらを活用してそれぞれの目的地へむかった。また、電車の高架と並走した路面電車は、桜木町停留所を経て市街中心部へと進んだ。駅舎正面左側には、伊勢佐木警察署の桜木町派出所も確認できる。

### 五、馬車道交差点

⑤は路面電車の路線が分岐する馬車道交差点の状況である。尾上町と伊勢佐木町を結ぶ吉田橋の北側から馬車道方面を撮影している。路面電車はここで市役所前、花咲橋を経て本牧方面へむかう路線と、吉田橋を渡って八幡橋、弘明寺方面へむかう路線に分かれた。電車後方のドームを備えた建物は常盤町四丁目の不動貯金銀行横浜支店で、煉瓦造四階建ての建物であった。馬車道周辺には、千代田生命や日本生命、渡辺銀行、武相貯蓄銀行などの支店が集まっていた。写真正面の毎便社は一八七九(明治一二)年創業の運送業者で、新聞原稿の発送を中心に、各種商品の輸送を担っていた。その右側には果物屋があり、夏の風物であるスイカが店頭に並んでいる。人びとの服装を含め、夏の様子がうかがえる。

(吉田 律人)

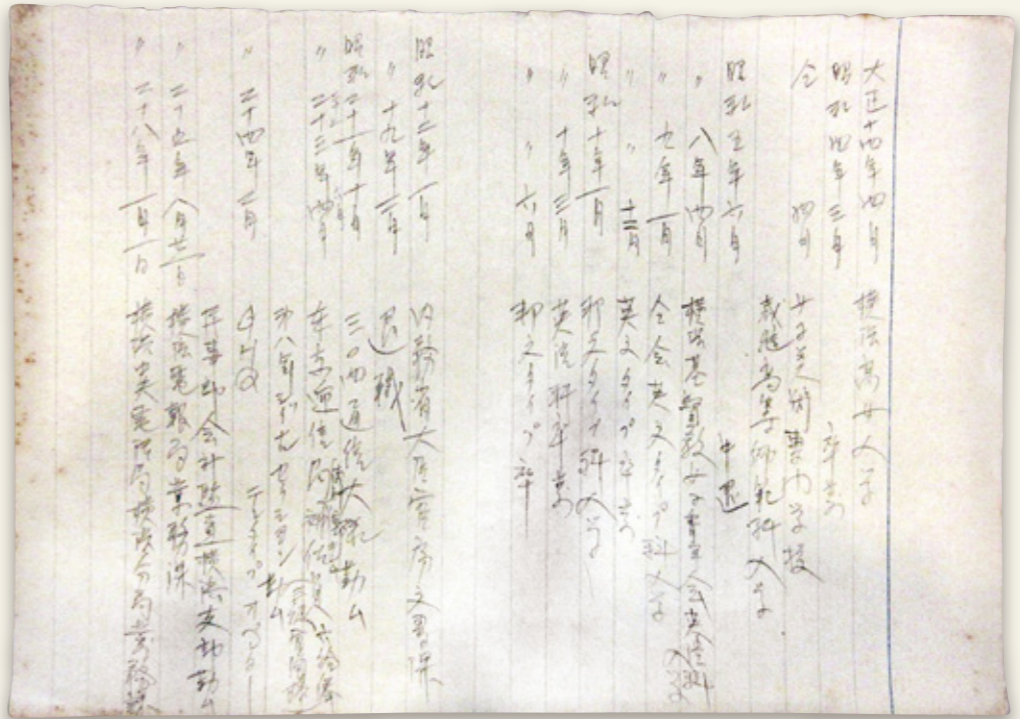


④ 桜木町駅  
1923(大正12)年8月 中野春之助撮影  
横浜市発展記念館所蔵

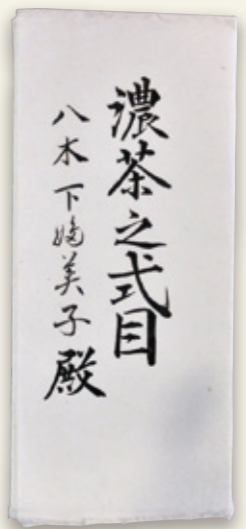


⑤ 馬車道交差点  
1923(大正12)年8月 中野春之助撮影  
横浜市発展記念館所蔵

# 八木下婦美関係資料に見る 「職業婦人」の戦前・戦後



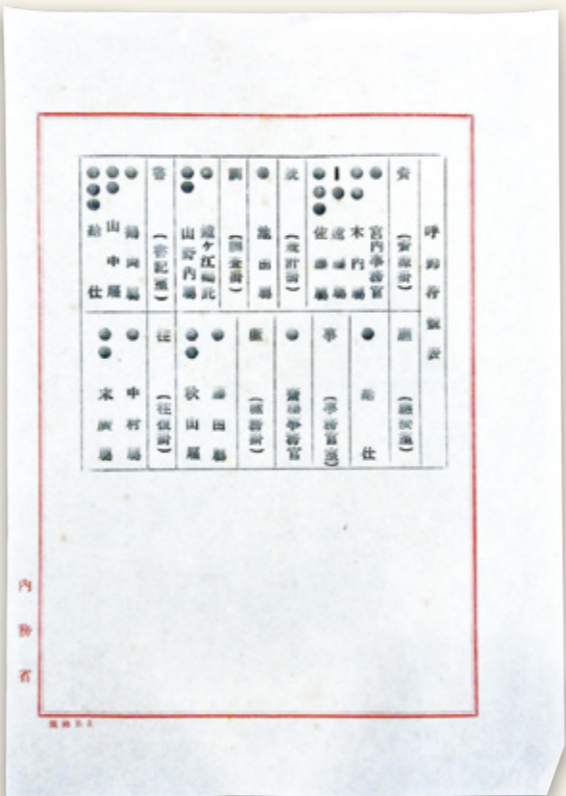
① 婦美さん作成の履歴



② 濃茶之式目



③ 裁縫箱



④ 呼鈴符号表

当館の入る建物は、1929（昭和4）年に建てられた横浜中央電話局の局舎であり、そこには多くの「職業婦人」が勤めていた。今回はその一人、1950～60年代にかけて横浜中央電話局に勤務した八木下婦美さん（1920～2008）に関する資料を紹介する。当館では婦美さんのご子息の八木下恭美氏から、婦美さんが通っていた学校の卒業証書や賞状、勤め先の辞令などの寄贈を受けた。婦美さんが戦後に作成した履歴（以下「履歴」①）をはじめとする資料群からは、昭和戦前期に横浜の高等女学校を卒業して社会に進出した婦美さんの、「職業婦人」としての生き方の一端がうかがえる。以下、資料の概要を交えて婦美さんの歩みをみていく。

婦美さんは1912（大正元）年12月、石川仲町（現石川町）で建具店を営む八木下紋治郎と妻ハル（旧姓刈込）の長女に生まれる（内務省作成の履歴書。以下「履歴書」）。1925年3月に横浜市立元街尋常高等小学校（現元街小学校）を卒業し（「横浜市立元街尋常高等小学校卒業証書」、横浜高等女学校（現横浜学園高等学校）本科に入学、1929年3月に卒業する（「横浜高等女学校卒業証書」）。この時期の女子教育は「良妻賢母」という語に象徴されるような家庭に入る者のためだけでなく、上級学校への進学者、商業的実務の従事者といった進路を選択する生徒のために具体的な配慮がなされるようになり、「職業婦人」という選択肢が高等女学校の学科課程では認められていく過渡期だった<sup>1</sup>。こうし

たなか、婦美さんは様々な教養や実務の技能を習得する。1923年3月には新未生流の華道初伝となり（「華術三才巻」、横浜高等女学校在籍時には新未生流茶道の「濃茶之式目」②）を伝授される。横浜高等女学校卒業後には女子美術専門学校（現女子美術大学）裁縫高等師範科に入学するが（「裁縫箱」③）、こちらは一年余りで中退する（「履歴」）。教養を習得する一方で婦美さんが取り組んだのが、語学やタイピングなどの実務技能の習得だった。1932年2月に横浜基督教女子青年会に入学し、英文タイプを修得した婦美さんは（「YOKOHAMA Y・W・C・A 実務科卒業証書」、1934年3月には英語科も卒業した（「YOKOHAMA Y・W・C・A 英語科卒業証書」）。

英語科卒業後の1934年8月、婦美さんは、同日1日に設立認可されたばかりの日本絹紬対米輸出組合に就職する（「履歴書」）。同組合は北米向け輸出絹紬の販路確保と輸出増進を目指して設立され、事務所を横浜と神戸に置いた<sup>2</sup>。ここで婦美さんがどのような業務に従事していたかはわからないが、同年度の横浜高等女学校同窓会機関誌『ゆかりの梅』の「会員消息」に、婦美さんは「相変らず月並の生活線上を歩いて居ります。去る八月より某事務所に勤め初めまして何ですか此頃力強く生活をエンジョイする事が出来てまゐりました」<sup>3</sup>と寄せている。

同号の特集「職業戦線を語る」には、婦美さん前後の横浜高等女学校の卒業生が就職先での仕事の内容や体験談を

寄せている<sup>4</sup>。「力強く生活をエンジョイする」という言葉からは、他の横浜高等女学校卒業生と同じように、自身も家ではなく外で働くことができることへの喜びや楽しみが読み取れる。ところが、翌年には同組合が解散し、婦美さんは退職となる。1936年には伊豆庄染工場、芝区三田松坂町（現高輪）の平和堂に就職したものの、いづれも病気や「家事の都合」で数ヶ月で退職した婦美さんは1937年1月、内務省の大臣官房文書課の臨時雇とな（「履歴書」）、「内務大臣官房文書課辞令（臨時雇を命ず）」<sup>5</sup>。その後、大臣官房文書課、土木局雇などを経て、1944年2月に内務省国土局を依頼雇するまで（「内務省国土局辞令（依頼雇）」）、7年間内務省で勤務した。同年6月には、金持龍雄氏（1904～1946）との間に長男

恭美を儲けている。婦美さんの内務省時代の仕事を伝える資料が「呼鈴符号表」④である。「一」「●」などの符号が各掛の担当者へ振られており、表中の事務官や属から利用された時期は1938年と推定できる。

戦後直後、婦美さんは第8軍の304通信大隊やGHQで働く（「履歴」）。第8軍ではテレタイプ（印刷電信機）による送受信を担う「テレタイプオペレーター」を勤め、戦前に習得した英語や英文タイプが、戦後の生活を支える術となった。その後、1950年8月の横浜電報局庶務課勤務を経て（「履歴」）では業務課とあるが辞令では庶務課となっている<sup>6</sup>、1953年1月、横浜中央電話局横浜分局加入課に入り、業務課、第一営業課などで勤務した（「横浜中央電話局辞令書」）。

ここまで婦美さんの歩みを見てきた。入学・卒業・免許取得・就職などの際に作成された公的な文書・遺物、内務省や婦美さんが作成した履歴書など婦美さんの履歴を示す資料や、『ゆかりの梅』に見られる本人の寄稿した文章は、婦美さんという一人の「職業婦人」が社会の変化のなかでどのように生きてきたのか、その足跡を私たちに伝えてくれる。

謝辞 本稿執筆にあたり、八木下恭美氏、横浜市史資料室上田由美氏に厚くお礼申し上げます。

（松本 和樹）

<sup>1</sup> 横浜市総務局都市史編集室編『横浜都市史II』第1巻上（横浜市、1993年）、1343～1344頁。  
<sup>2</sup> 『官報』第2278号、昭和9年8月4日、151頁。  
<sup>3</sup> 横浜高等女学校同窓会『ゆかりの梅』第36号（1935年）、43頁。横浜市史資料室所蔵。  
<sup>4</sup> 同前、8～23頁。同時期の横浜の高等女学校の卒業生の進路については、上田由美「戦前期における横浜の高等女学校卒業生と洋装」『横浜都市史資料室紀要』第13号、2023年を参照。  
<sup>5</sup> 戦前の官庁での女性の勤務については、国立歴史民俗博物館監修『性差の日本史』プロジェクト編『新書版 性差（ジェンダー）の日本史』（集英社新書、2021年）を参照。  
<sup>6</sup> 内閣印刷局編『職員録 昭和13年7月1日現在』（内閣印刷局、1938年）、39頁。